

音楽

バロック時代の楽器と演奏様式

総和北中学校

1年 安喰 由実

宮本 紘花

1	はじめに（研究の動機）								
	私達の中学校では1学期の音楽の授業でヴ								
	ィヴァルディの「春」を勉強しました。授業								
	では「春」について時代や曲の基になったソ								
	ネットについてなど、いろいろな側面から学								
	習したのですが、その中でも私達にとって一								
	番印象に残っていることは、演奏に使用され								
	ている楽器についてビデオや実物の楽器を見								
	て学習したことでした。授業では、現在の一								
	般的なオーケストラの演奏様式と当時の楽器								
	を使用したオーケストラを比較して鑑賞する								
	活動がありました。そうした鑑賞を通して								
	感じたことは、ヴィヴァルディの時代の楽器								
	の響きや構造が、現在使われている楽器とは								
	だいぶ違っているということです。私達は吹								
	奏楽部に所属しているのです、そういった楽器								
	の違いにとっても興味を持ちました。そこで私								
	達は、ヴィヴァルディが当時使用していた楽								
	器と現代の楽器との響きの違いの秘密を探る								
	ため、当時使われていた楽器についてより深								

く調べるとともに、ヴィヴァルディが活躍していたバロック時代の演奏様式について調べてみようと考えました。

2 授業での取り組み

(1) チェンバロとピアノとの違い

「春」に用いられる楽器について、授業ではまずチェンバロについて学びました。

そこでまず驚いたのはチェンバロとピアノは形がとても似ているのに音色が全く違うものであるということです。チェンバロの音は普段聴きなじんだピアノの音に比べ、柔らかく繊細な音がしましたが、その音色の違いの原因は構造の違いにあるようでした。授業ではピアノの内部を見せてもらいましたが、その構造はピアノの内側にある金属でできた枠に張られた金属製のピアノの弦をハンマーで叩いて音を出すというものでした。それでピアノの場合は指先のタッチで強弱をつけることができ、弦を支え

ている 枠が 金属で 出来て いるため それまで
の 鍵盤 楽器 よりも 大きな 音が出るといふこ
とで した。



一方、チェンバロの方の構造については
ビデオでの鑑賞となりました。チェンバロ

の構造はピアノの外枠とは違い、木の枠でできているので弦の張力が弱いこと、ピアノとは違い、鳥の羽でできた爪で弦をひっかくために、ピアノのように大きな強弱の差をつけることができず、とても柔らかく繊細な音色であるということがわかりました。また、ピアノに比べチェンバロの音程は幾分低いことがわかりました。

(2) 弦楽器について

次に授業では、弦楽器について学びました。弦楽器についてはビデオの鑑賞と、先生が実物のチェロとコントラバスを弾くのを見せてもらうことで学習しました。ビデオでは、現在一般的に使用されている弦楽器による演奏とヴィヴァルディが活躍したバロック時代に使用された楽器を再現した古楽器を使用した演奏を鑑賞しました。そうした鑑賞を通して感じたことは、弦楽器の音色が現在のものと古楽器とでは違っているということです。古楽器の音色は現在

の弦楽器に比べて、幾分かすれたような洪い音色をしていました。また、右手の弓の形も現代の楽器とは違っていました。現代の弦楽器の弓はまっすぐな形をしています。が、古楽器の弓はその名の通り形が弓矢の弓のような形をしていました。また、現在の楽器を使ったオーケストラの演奏でも、弓を普段持つ場所よりも左寄りを持っていることに気づきました。また、音程に関してもチェンバロと同じで、古楽器は現代の楽器よりも低いことに気づきました。

3 授業で感じた疑問への取り組み

そこで私達は、そうした授業で感じた楽器についての疑問点について調べてみようと思いました。内容はバロック時代の楽器とその演奏様式についてです。そのためにまずヴィヴァルディの活躍したその時代背景やバロック時代について調べる事にしま

した。

(1) ヴィヴァルディの生涯

アントニオ・ヴィヴァルディ (Antonio Vivaldi) は , 1678 年 3 月 4 日に , ヴェネツィアの当時のサン・ジョヴァンニ・イン・ブラーゴラ広場の母親の実家で生まれましました。

父親のジョヴァンニ・バッテリスタは , 簡単な外科手術も手がける理髪師でしたが生まれの町がヴァイオリンの生産地だったせいか , 幼い頃誰かに手ほどきを受けたのか , やがてヴァイオリニストとしても活躍するようになります。

1685 年には , サン・マルコ大聖堂のマルチャーナ礼拝堂付き合奏団にヴァイオリニストとして迎えられました。そこから得ていた年棒は決して良い給料とは言えませんが , 弟子もとっていたからやっていけたのでしょう。しかし , 次第に認められて 1689 年には昇給したばかりか , その年から 1693

年までの4年間は、市内に4つあった慈善
院付属音楽院のひとつであるメンディカン
ティで、ヴァイオリン教師を兼務していま
した。やがて、息子のヴィヴァルディも同
じ道をたどることになります。

ジヨバンニとヴィヴァルディは本当に仲
の良い親子だったようで、共にチームを組
んで、二人一緒の公演旅行にも出かけた
りしています。例えば、1697年2月28日には
ヴィヴァルディは父が勤める合奏団のクリ
スマス演奏会で、父と肩を並べて演奏して
います。この時ヴィヴァルディは18歳でし
た。

演奏旅行では、1701年10月、トリノにで
かけました。1702年はオペラの演奏のため
に3カ月ヴェネツィアをはなれ、1711年2
月にはブレーシャに、1713年の夏はヴィチ
エンツァに2人で行ったことがわかってい
ます。

ヴィヴァルディは1703年3月23日25歳で

司祭になり、サン・ジョバンニ・イン・オレーオ教会で初めてのミサを行いました。ですが、当時ピエタ慈善院付属音楽院の合奏長のフランチェスコ・ガスパリーニの強い推薦で、この年の8月からヴァイオリン教師として女性だけの合奏団の教育に従事しました。

(2) バロック時代

バロック時代とは、およそ16世紀から18世紀前半にかけての音楽時代のことです。バロック時代には多くの音楽の巨匠が生まれました。ヴィヴァルディは後期バロックの巨匠です。

バロック音楽を社会的に支えたのはベルサイユ宮廷の絶対主義の王政と、都市の市民層です。ベルサイユ宮廷では、華麗で祝祭的な宮廷オペラ、バレエ、管弦楽組曲などが催されました。また、市民層では、小規模なソナタや歌曲などが好まれて演奏されていました。

主にバロック音楽の特色は、全く違う曲想を結びつけることにより、緊張感を持った劇的な表現力があるということです。また、喜び、悲しみ、怒り、憤怒などの様々な心の状態を純粹に表現したような情緒表現もこの時代の特徴です。

(3) バロック時代の器楽

鍵盤楽器について

この時期にはオルガンやチェンバロ、クラヴィコードなどの弦楽器、ことにヴァイオリンのための音楽が盛んにつくられていました。鍵盤楽器では、オルガンとその他のものとの区別が次第に明確になっていきます。オルガン音楽では、フーガをはじめ、ファンタジア、トッカータ、プレリュード、パッサカリア、シャコンヌなどの固有の形式が確立するとともに、演奏もかなりはっきりした形でまとまって、名人芸的な面が強くあらわれるようになってきます。それに対し、チ

エンバロやクラヴィコードの場合には、
組曲が中心的な曲種となり、この2種の
楽器におけるそれぞれの特徴が次第に作
曲上、明確にされるようになりました。

弦楽器について

弦楽器では、ヴィオール属にヴァイオリ
ンが加わりました。イタリアに有名な
ヴァイオリン製作者、ガスパロ・ダ・サ
ロ、マジーニ、アマーティ、ストラディ
バリなどが輩出し、すぐれた楽器がつく
られました。彼らの製作した楽器は今で
もなお、修正の必要がないほど完璧なも
のと考えられています。それとともに、
演奏法も次第に確立されるようになり、
この分野でも特にイタリアを中心に名手
が輩出し、多くの名曲がつくられていき
ます。

ヴァイオリンの出現と進歩によって、
管弦楽という形での合奏音楽が発達しま
すが、楽曲としては合奏協奏曲のような

対位法的な様式の音楽が中心でした。管楽器では、オーボエとファゴットがよく使用され、ヴァイオリンとともに合奏音楽の中心となっていきます。また、中世時代に盛んに用いられていたリコーダーは、横笛のフルートにその位置を取って代われ、金管楽器はまだ現在のようには確立されていませんでした。

器楽の発達段階

この時期の器楽の発達段階は次のように考えられています。新しい器楽形式の発生とそれに伴う様式の発達、各楽器に固有な演奏法の確立と演奏技巧の発達、ポリフォニーに対するホモフォニーの優先、合奏形式の進歩などです。そして、器楽のこうした発達過程の中で、通奏低音と呼ばれる奏法が生まれてきました。これは低声部に数字を書き込み、それによって和声の進行を示したもので、16世紀後半に使われ始めました。このような

形で書かれた低声部はバツソ・コンティ

ヌオと呼ばれており、2つの楽器または

それ以上の楽器で担当されていました。

(4) バロック音楽とその演奏の特徴

バロック音楽が栄えた16世紀から18世紀

半ばは、絶対王政の時代です。キリスト教

に対抗して、王侯貴族や都市など世俗権力

が台頭したため、音楽も宗教的権威を離れ

た世俗的な領域で発達しはじめました。そ

れまでの芸術としての音楽は、宗教的な声

楽曲でしたが、それに加えて支配階級と裕

福な市民の社交や個人的な楽しみのため、

器楽曲がたくさんつくられるようになりま

した。また、多くの楽器が発明され、従来

の楽器にもさまざまな工夫や改良が加えら

れました。

そこでとくに好まれたのは比較的小さな

編成による合奏曲や室内楽曲でした。そし

て、抑揚をはっきりつけ、一つの音の内

も微妙に表情を変化させながら、語りかけ

るように演奏するのが理想とされました。

このようなバロック音楽の特徴とその表現

スタイルは、当時の楽器とその特性を生か

した奏法によって、初めて可能となったの

です。

(5) 音楽のスタイルの変化と楽器の改良

18世紀も後半になると、絶対王政も崩れ

近代市民社会の成立・進展とともに、音楽

をめぐる環境は大きく変わります。演奏の

場所は宮廷の広間や上流階級のサロンなど

から、一般市民が訪れるコンサートホール

や大劇場へと移りました。音楽作品には新

興の市民階級の精神を反映して、より強弱

や緩急、高低の振幅の幅が大きい楽想と明

快で聞き取りやすい旋律、そして楽器には

より遠くまで届く大きな音が求められまし

た。

このような要求に応じて、楽器の改良が

行われ、またそれに見合ったかたちで奏法

が変化した結果、個々の楽器は音量の増大

に加えて、音域の拡大、そして力強く輝かしい音を獲得しました。こうしてほとんどの楽器は19世紀半ばまでにほぼ今日の形になりました。

一方、リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロ、リュートなど、バロック時代の室内楽で最もよく使われたいくつかの楽器は、楽器のつくりの問題や音の出かたの問題などから、改良の余地が少なかつたため、廃れてしまったのです。このようなことから、かつては古楽器に対して「未熟で不完全な楽器」という誤解や偏見もあったようです。しかし、改良により生き残った楽器にしても、粒のそろったよく通る大きな音が出せるようになった反面、微妙な響きの陰影は乏しくなりました。

(6) バロック時代の弦楽器の弓について

授業での鑑賞を通して、現在のオーケストラでもバロック時代の曲目を演奏するときに弦楽器の弓の持ち方が違っていること

に気づきましたが、その理由はバロック時代の弓の構造にあるようです。バロック時代の弦楽器の弓は現在の弓に比べて軸が細く、長さも少し短いものを使用していました。また、弓の毛が現在の弓に比べて約半分の少なさだったようです。そのため、現



在の弓に比べると太くて均質な音は出にくいものでした。現在のオーケストラでバロック時代の曲目を演奏するときのように、先生からチェロの弓をお借りして実際よりも短く持ってみると普通の持ち方の時には

弓の先の方にあった弓の重心が真ん中あたりに感じられるようになりまし。現在のオーケストラで弓を短く持つのにはこうした理由があるようです。



(7) バロック時代の音程について

現在の楽音の音高の基準は440ヘルツの音をラの音とすることが決められています。しかし、バロック時代の音程はそれとはだいぶ違っていたようです。バロック時代に製造された楽器（特にオルガン）の音程を専門家が調べたところ、現在の音

程より約半音ほど低いものが多かったよう
です。ですから、現在古楽器でバロック時
代の曲を演奏するときにはこの音程を簡単
な基準にしようとして提案されました。しかし
現在の弦楽器の弦をこの高さで合わせよう
とすると、張りが足りなくなってしまうよ
うです。

(8) 古楽と古楽器の復活

19世紀の末以来、細々と続けられてきた古
楽復興運動は、20世紀の末には大きく花開
き、その成果が知れ渡るようになりまし
た。さらに世紀が改まった今日では、ルネ
サンス・バロック音楽にとどまらず、古典
派やロマン派の作品がその当時の楽器と奏
法により演奏されることもよくあります。

4 おわりに

私達は1学期に学習したヴィヴァルディ
の「春」について調べていくうちに、自分
達でも調べはじめる当初に思ってもみなか

